やまと万葉がたり

珠に貫く 楝を家に 植ゑたらば 山霍公鳥 離れず来むかも

（大伴書持 巻十七・三九一〇）

早くも梅雨入りしてしまいましたが、本来なら今ごろは風薫る季節です。この時期になるときまって、小学校の校庭にあった大きなセンダンの木を思い出します。学校自体が高台にあり、校庭の端に植えられたその木に登ると、市内を一望できるだけでなく海まで見はるかすことができました。四方に伸びた太い枝の一本は座るのに具合がよく、葉擦れの音や鳥のさえずりを聴きながら過ごした記憶があります。

「楝」とはセンダンの古名です。平安時代の辞書である「和名抄」では「楝」の字にアフチの訓があり、このころには「楝」の文字があてられていたことがうかがえます。万葉歌に4例あり、「安布知」（当該歌）「阿布知」（巻五・七九八）「相市」（巻十・一九七三）「安不知」（巻十七・三九一三）と、いずれもアフチとよめる表記です。大成する人は幼いころから優れているという意味の「栴檀は双葉より芳し」の「栴檀」は、現在のセンダンではなくビャクダン（白檀）のことです。

この歌では、センダンを「珠に貫く」と表現しており、花を糸に通して薬玉としていたとみられます。薬玉は、五月五日の端午の節句に邪気を払う物として用いられました。実際に、センダンの実や樹皮は生薬として知られ、ぬり薬や内服薬として用いるほか、葉にも除虫効果があるといわれます。ホトトギスの声を端午の薬玉にすると表現した歌もあり（巻八・一四六五）、旧暦五月五日はセンダンの花が咲きホトトギスが鳴く時期と認識されていたようです。

作者の大伴書持はこの歌を兄・家持へ贈っています。ホトトギスは万葉集中で最も多く詠まれた動物で、とくに家持が好んで歌に詠みました。

【訳】珠として貫く楝の花を家に植えたら、山霍公鳥はいつも来るかなあ。

（県立万葉文化館指導研究員・井上さやか）

＝次回は6月2日